

一 般 演 題 抄 錄

13. プレオマイシン肺線維症におけるステロイド大量投与の効果について

澤口博千代 東田有智 河合右展 仲原 弘 岩永賢司

村木正人 原口龍太 久保裕一 福岡正博

近畿大学医学部第4内科学教室

目 的

マウスプレオマイシン肺線維症モデルを用いて肺線維症の病態解析およびステロイド大量投与時の治療効果を検討した。

方 法

ICR系マウス10週齢にプレオマイシン75 mg/kgを10日間腹腔内投与して肺線維症モデルを作製した。生理食塩水を同様に投与した群をコントロールとした。さらにプレオマイシン投与8日目から10日目にかけてメチルプレドニゾロン1 mg/body 3日間腹腔内投与を併用した群を作り、それぞれの群について肺組織の病理学的変化およびBALF中総細胞数、細胞分画、サイトカイン mRNA の変動を測定した。

結 果

プレオマイシン投与によって、IL-1 β , TNF- α , PDGF-A, TGF- β 1, MCSF の各 mRNA の発現の増加が認められ、肺線維化が生じる事が確認された。また、ステロイド投与をプレオマイシン投与に併用する事で完全ではないが肺線維化が抑制され、IL-1 β , TNF- α , PDGF-A の mRNA 発現増加が抑制された。TGF- β 1 mRNA 発現増加は全く抑制されず遷延した。

結 論

ステロイド投与は、プレオマイシンに誘発される肺線維症に対して抑制効果をもつことが示唆され、肺線維化が完全に抑制されない原因は、TGF- β 1 の発現を抑制できない為ではないかと推察された。

14. レーザー抜毛後のマウス毛組織再生における細胞動態の検討

山下裕嗣 愛須きぬ代 手塚 正

近畿大学医学部皮膚科学教室

近年、レーザー装置を用いて抜毛が試みられ、有効との報告がなされている。我々も外来でレーザー治療を行うようになってから有毛性色素性母斑の治療の機会が増加しており、新生児の額の半分を被う先天性有毛性色素性母斑にQ-スイッチ・ルビー・レーザー照射治療を行ったところ、硬毛は殆ど消失し、僅かの細い硬毛を残すだけとなり正常児と同様の額が出来たことを経験している。

このようなレーザー抜毛の過去の報告のほとんどは短期間の観察に基いた臨床的效果のみを報告したもので、抜毛のメカニズム及び再生のメカニズムの面からは検討されていない。そこで、今回マウスを用いてレーザー抜毛を行い、その後の毛の再生について検討を行った。

生後5日目のマウス (C57BL/6CrSlc) に対しQ-スイッチ・ルビー・レーザー照射を行い、照射後30

分、2日目、7日目、9日目、14日目に同部位を生検したところ組織学的には、まず毛の構造が崩れ、毛組織全ての破壊・消失を認め、その後毛が表皮細胞層より再生することがわかった。

bromodeoxyuridine (BrdU)・抗BrdUモノクローナル抗体を用いた免疫組織化学的検討で、BrdU陽性細胞は照射後14~15日目に基底細胞が真皮側に突出した (budding) 細胞索の辺縁に集簇し、17日目には hair peg を形成し更に伸長して bulbous hair peg を形成した細胞に BrdU 陽性細胞が認められた。この所見はヘマトキシリン・エオジン染色標本の経時的染色結果とよく一致している。これらの結果から、レーザー抜毛後の毛の再生は正常の毛のサイクルに基いた毛の再生や他の抜毛法を行った後の毛の再生のプロセスと異なり、胎生期の毛の発生に類似したプロセスをたどることがわかった。